

## 信じるということ

二〇一七年五月三十一日

バイブル・サービス

氏 家 靖 浩

皆さん、こんにちは。講義でお会いしている方としていない方がいると思いますので、自己紹介をしたいと思います。私は人間発達学科で教育相談と教育心理学を担当している氏家靖浩です。今日はよろしくお願ひします。

私がこの場でお話をさせていたたくのは、今回で三回目です。昨年と一昨年と機会を頂戴し、ヨーロッパと北海道の話をしていただきましたが、今回はまったく個人的な話をさせていただきますと思っています。

私は本学に勤める前から、いくつかの大学で教える機会がありました。大学で仕事をする以前は、病院と施設でカウンセラーという立場で仕事をしていました。心に悩みを抱えた方を受け止める仕事です。その仕事で、私の一番の大きな課題は、生きる希望を無くした方に対し、いかにして、「人生は楽しいよ」と伝えられるかということでした。ですから、今でも生きる希望が無くならず、明日にも死んでしまいたいという思いの人を見ると、私は、その人を何とかしなければいけないというスイッチが入ります。昨日のニュースでも流れていましたが、日本は、今でこそちょっと良い方向に向かっていますが、それでも年間に三万人近くの方が自らの命を絶つと言われています。皆さんご家族の方や知り合いの方で、自ら命を絶ったという方もいらっしゃるかもしれません。あるいは絶つこ

信じるということ

とを考えてしまったという方がこの中にもいるかもしれません。人間というのは、考え方一つでどんなに苦境に置かれていても、少しでも良い方向に向かっていけるということが私の信念でもあります。そのことから、今日は私の個人的な話をさせていただきたいと思います。

私は病院で仕事をしていましたから、医療関係について詳しいということは、私の家族も知っていました。ところが今から七年ほど前に、父親に急に癌が見つかったと言われました。結論から言いますと、私の父はもうこの世にはいません。父は自分に癌が見つかったと言われた後に、病院で仕事をしたことがある私に真っ先に相談してくれるものだろうと私は思っていました。ところが私の父親は、私には全然相談をしてくれませんでした。私に相談もなのまま、勝手に病院を三ヶ所ほど訪れ、自分で決めた病院で手術を受けました。その後、四年十ヶ月ほどとても楽しい日々を過ごし、八十歳で天に旅立って逝きました。私からすると、息子は病院に務めていたカウンセラーで、生きるということの希望を皆に与えるような仕事をしているのに、どうして息子の私に相談してくれなかったのか、ということが心の中に引っかかっています。私は、父の手術後、落ち着いた頃に聞いてみました。「手術を受ける病院を決めるとき、どうして病院関係に詳しい息子を相談相手に選んでくれなかったのか」と言うと、二つの答えが返ってきました。一つは、「おまえに苦しい思いをさせたくなかった」と言われました。自分が癌だということばかり、おまえに話せば、辛い思いをさせてしまうから言わないつもりだった、と言うのです。しかし、息子の私には言わないつもりだったと言いなながらも、遠まわしに伝わるようなことはたくさんしていました。それならば最初から言ってくれたほうが私は気が楽でした。ほのめかすようなことは何回も言われましたが、やはり直接は言えなかったそうです。一番大切な人にこそ、一番大切なことが言えないということを、私はこのときに学びました。父のもう一つの答えですが、どうしてその病院を選んだのかと聞いたときに、ある程度予想はついていた

話ですが、私の実家は宮城県の北部の大崎市というところです。宮城県の北部にある大崎市、栗原市、登米市では、「神様」「拝み様」と言われる方々が結構活躍されています。その方々がどういう立場の人かは私にも正直よくわかりません。ある日突然、自分から神様と名乗る人もいますし、あるいは父母が神様という家系だから神様だと名乗る人もいます。私の家では「神様」と言いましたが、いろいろな言い方があり、「拝み様」という言い方をする人たちもいるようです。要はその地区の人に悩み事が起きたときに、その方のところへ行き相談をするのです。神様は相談を聞いてお金を取るわけでもなく、何か利益を得るわけでもありませんが、悩んでいる方にそれなりの方向性を与えてあげます。このような人は、宮城県北部の栗駒山、船形山の麓、あるいは江合川、鳴瀬川の周辺に多く暮らしています。このような話は、宮城県だけでなく北海道から沖縄まで全国にあります。沖縄ではユタやシャーマンと言い、とても有名です。研究に値するということで、そのことを研究している学者もいます。私は、研究という関心はまったくありませんが、たまたま私の父親は、あるおばあちゃんをとてん尊敬していました。このおばあちゃんが私の父親にとっての神様という位置付けだったらしく、氏家家にとっては神様と呼んでいたわけですが、悩み事が生じるとその方のところへ相談に行っていたようです。私からすれば、なぜ医療に詳しい息子に頼らずに、私もよくわからない人のところへ相談に行くのかという悔しい思いと、やはり、私の父親にとっては私よりも神様の方を選んだのだなという、いろいろな思いを考えながら聞いていました。父親が神様という方のところへ行き、「私は癌だと言われたのですが、どうしたらいいですか」と言うと、その神様は、次のような二つの回答をしてくださいます。一つは、「きちんと病院に三ヶ所行ってください。そして、三ヶ所の病院の検査結果を私に見せてください。それからもう一度判断します」と言ったそうです。私にお金を出せば病気が治るとは言わなかったそうです。もう一つは、「もし病院を三ヶ所回って、癌であるということがはっきりしたら、次にある指示を出しますから、

信じるということ

私の言うとおりにしなさい」と言われたそうです。父は、私にはまったく相談をせずに三ヶ所の病院で診察してもらい、三ヶ所の病院からほぼ同じように癌と診断されました。そして、その診断書を持って神様のところへ行ったときに、「あなたの家から見ても、東の方向にある見晴らしのいい病院に行ってください。そこで治療を受けてください」と言われたそうです。「そこに行ったら治るんですか」と聞くと、それには応えなかったそうです。「でも、まだまだ希望はありますから、あなたの家から見て、東の方向にある見晴らしのいい病院に行ってください」と言われたそうです。私の父は古い人ですからスマホなどは使えないので、本屋で紙の分厚い地図を買ってきて、まず自分の家から東の方向にある見晴らしのいい病院へ行ったそうです。見晴らしのいい病院と言っても、その病院はとても高い建物の病院で、常に混んでいる病院でした。玄関を入ってあまりにも患者さんがたくさん待っていたので、この待合室にいただけで嫌だと思っただけです。父はそのことを伝えるために神様のところへ行くと、「もっと東の病院に行きなさい。もっと東に行くと、もっと見晴らしのいいところがあるはずだ」と言われたそうです。そしてまた地図を片手に車を走らせて東の方へ行きました。変な話ですが、そのとき父は、三ヶ所の病院で癌だと診断されて、神様の言われたとおりに東の方向を探して行くと高い建物の病院がありました。そこは玄関を入っただけで混んでいて憂鬱な気持ちになったと思われます。しかも自分は癌を患っているはずなのに、もしかするとこの先に何か嬉しいサプライズがあるのではないかと、まだこの先、何か良いことがあるのではないかとという希望が沸き上がってきて、とても楽しいドライブだったそうです。その後、父は小高い丘の上にあり建物自体は高くはないのですが、ほとんどが空きの病院を見つけたそうです。その待合室はとも古ぼけてはいるけれど見晴らしも良く、ここかも知れないと思いきっそく診察を受けると、空いている病院なので、さっそく手術をしましようにいうことになりました。そして手術をして一命を取りとめて、そこから約五年近く人生を楽しく過ごすことができ

ました。

このことから私は思うことが二つあります。一つは、おそらく人間は、一番大切な人にこそ、一番大切なことを話さないのかもしれないということです。私の父は、とにかくおまえに苦しい思いはさせたくないから、おまえには癌のことは言えない、と言っていました。しかし、最期のほうでは、本人の中でも自分の命がいよいよ厳しいと思ったでしょう、自分の命があとわずかだと思ったときには、他の家族は寄せ付けませんでした。息子の私には側についてくれと言い、私は最期にとってもいい時間を過ごすことができました。父親のわがままを散々聞かされましたし、私自身もわがままを言いましたが、常に父の最期の瞬間は私が看なければいけないという思いがありました。それから、仕事が終わった後に病院へ行き、朝方までそこで過ごし、そのまま出勤するという時期がありました。そのことには誰も気付いていなかったと思います。なぜなら私は死を前にした父と、とても良い時間を過ごせていたので、体は疲れていましたが気持ちの上ではとてもいい状態だったと思います。繰り返しますが、一番大切なことは、一番大切な人には話さないということと皆さんにわかってほしいのです。そして、もう一つ私の父にとっては、地域を見守っている「拝み様」や「神様」と言われる人のことをすごく信じていたのです。一般的な表現になりますが、信仰を持つということとはとても大切なことだと思います。本学は、外から見たらキリスト教の大学、あるいはカトリックの大学という言い方をされると思います。しかし、すべての方が信者ではありません。しかし、私たちは信じることを、信仰することとはできません。それは必ずしもキリスト教でなくてはいけません、カトリックでなくてはいけないというものではなく、私たちなりに、その人なりに信じられるものを信じるということから始めてもいいと思うのです。私は自ら命を絶とうとした方がなんとか生きていこうと希望を見い出させる仕事をしてきました。私は、そのような方に「神様を信じなくてもいいから、家族を信じなくてもいいから、私

信じるということ

を信じてくれないか」と言いました。相手に、「あなたを信じて何になる」と言われたら、「私を信じて何もならないかもしれないけれど、でも、もしかして人を信じると、ちょっとだけでも楽しいことがあるかもしれない、ちょっとだけでも良いことがあるかもしれない。それが多分、信仰であり、信じるということであると思います」と偉そうに言いながら今に至っています。しかし、私自身はなかなか神の領域には近づけず、どんどんメタバダ中年になっていきます。今、腹回りが百センチを超えています。髪の毛はどんどん薄くなりわずかな髪の毛もどんどん白くなってきました。私は皆さんに信じてくれと言う割には、全然それを言うだけの信頼感がないことも自覚しています。すでに信仰を持っている方はそれでもいいと思います。しかし、何から信じたらいいのだろうとわからないのであれば、大学の講義で聞いている先生の中で、この先生の話は聞いてみたいと思う人がいれば、そこからスタートしてもいいかもしれません。信用できる友達の話でもいいと思います。なかなか大学生活になじめないというのであれば、音楽でもいいと思います。私の娘は「Flumpool」や、「SEKAI NO OWARI」の信者です。私の息子は高校野球を一所懸命しています。野球の信者、野球の指導者を信じているから苦しい練習にも耐えられる、と言えでしょう。先ほど、一番信じている人にこそ思いが言えないと言いました。昨夜の夜十時から「あなたのことはそれほど」というドラマがありました。ドラマでもいいと思います。新垣結衣でもいいと思います。「恋」でもいいと思います。いろいろな「信じられる」があるのだと思います。信じないで生きるよりも、誰かを信じて、何かを信じて、ちょっとでも前向きに生きていくだけで希望は見出せるのだと思います。

皆さんはブルーゾーンという言葉をご存知ですか。『文芸春秋』五月号でも特集されていますが、世界で百歳以上長生きしている人のいる土地に共通点が九つほどあるそうです。そのうちの半分は精神的なものです。最初のいくつかは体そのものに関わるものです。要するに、豆類を多く食べましょう、煙草は吸わな

いようにしましょう、というものですが、残りの半分は心の問題です。九つあるうちの七つ目が信仰心を持つことです。信じること、そうすれば長生きができる、あるいは自分の人生が充実して、仮に人生そのものが短くても、とても楽しい生き方ができるということが学術的に裏付けられている研究でもあります。ブルーゾーンという言葉は、何から取った言葉かわかりませんが、少なくともそういうことが証明されています。興味のある方は調べてみてください。

今、私はこのようなことを言いましたが、私のことは信仰しないでくださいね。私はそこら辺を歩いているただの変なメタボおんちゃんですから、私を見かけたら「おーい、くまモン！」と大きな声をかけてください。そのときには私も「おーっ！」と声かけをしたいと思います。

(人間発達学科教授)